

朝の連続テレビ小説にみる戦争描写及びヒロインの戦争観 —2011年以降の作品を中心に—

Analysis of The Wartime Memory and Heroines' View on War from NHK Morning Television Series, *Asadora* : Focusing on Works after 2011

黄 馨儀
Hsinyi HUANG

台湾中国文化大学日本語学科 助教
Chinese Culture University Department of Japanese Language and Literature

要旨…本稿はNHK朝の連続テレビ小説（以下、朝ドラと略する）を研究対象に、2011年以降の作品を中心に、戦争描写を含む作品を分析したものである。朝ドラは従来、女性の生涯をテーマに展開し、明治・大正・昭和を背景に「戦争」を語る作品が多数存在している。筆者のこれまでの分析によると、朝ドラにおける戦争描写には以下のような特徴がある。まず、朝ドラで描かれている女性像は、「銃後の守り」といった戦争体験に集中する。次に、各作品の東京大空襲、玉音放送の表現が一致している。さらに、多くのヒロインは反戦の立場をとり、特に70年代と80年代のヒロインの「戦争への嫌悪」は顕著である。なお、ヒロインの反戦の立場は作品間で一貫しているが、2011年の『おひさま』は異質の存在である。『おひさま』以降の作品を観察し、ヒロインの戦争観に注目しつつ、本稿はNHK東京放送局（以下、AKと略する）及びNHK大阪放送局（以下、BKと略する）の異同についても注目する。

分析の結果、2011年以降の作品での戦争の表現は今までと類似しているが、戦後のGHQによる統制に関する描写が増えた。そして、AKよりBKの作品で「戦争への嫌悪」が強調されており、ヒロインの戦争への嫌悪は全盛期と似ている傾向がある。『カーネーション』（2011年、BK）及び『ごちそうさん』（2013年、BK）での強い反戦の態度と比べ、『おひさま』（2011年、AK）は戦争賛成、『梅ちゃん先生』（2012年、AK）及び『花子とアン』では戦争に対する考えが曖昧に描かれていた。しかし、全体的に朝ドラヒロインは反戦のメッセージを含む表象であり、2011年の『おひさま』で見られた戦争観の異質性は、2011年の東日本大震災に関連し、AKとBKの朝ドラヒロインの戦争観の分岐点となった可能性がある。

キーワード 朝の連続テレビ小説, 戦争と女性, 戦争の記憶, テレビドラマ研究

1. はじめに

(1)朝ドラとは

NHK朝の連続テレビ小説（以下は朝ドラと略する）は、1961年から放送され続けているテレビドラマシリーズである。毎回15分という形式で、初放送から1974年度までは基本的に年に一作、1975年度以降は年に二作制作されている。黄（2010）の考察によると、1961年から1965年の朝ドラは文学性の高い作品をテーマに制作されていた。しかし、女性視聴者から高い支持を得た1966年の『おはなはん』を転換点にヒロインが波乱万丈の生涯を生き抜く「女の一代記」が定番となった。テレビが人々の主な娯楽となった70年代の朝ドラは、常に40%以上の視聴率を維持した。そして1983年の『おしん』、1985年の『藩つくし』などの人気作の放送によって、朝ドラは大河ドラマとともに日本の「共通文化を育てる物語」と呼ばれ（鶴見1991：241）、国民的番組として位置づけられるようになった。昭和から平成へと移り変わるとともに、現代女性の生き様を描く作品が次第に増え、

特に2000年以降の朝ドラは、夢(恋)を追いかける女性、家族・地域をテーマに制作されていたが、視聴率の低下がしばしば話題となった。放送時間が15分早まり、昭和の物語を題材とした2009年の『ゲゲゲの女房』をきっかけに、近年は再び「明治大正昭和」及び「戦争」という2つの要素を用いた朝ドラの王道—女の一代記に回帰する傾向が見受けられる。

(2)戦争と女性—先行研究の検討

従来の戦争に関する研究は、政治学、歴史学、メディア社会学といった分野で多く取り上げられてきた。その中でも「戦争と女性」をテーマとする研究の多くは慰安婦の研究が中心であったが、ここでは本稿の中心であるメディア研究の分野に焦点を絞り、先行研究をまとめた。先行研究で論じられる「時代」は主に戦時と戦後の二段階に分けられ、その「媒体」は活字メディアと映像に二分できる。まず、活字メディアからまとめた。

若桑(2000)は戦時中の国策婦人雑誌の記事及び視覚(挿絵)の特質を分析し、慈愛の母子像、勤労婦人像が繰り返され、戦時中のプロパガンダとして女性雑誌が使われたと指摘した。また、近代女性文化史研究会による『戦争と女性雑誌』論文集(2001)は、戦時下の女性雑誌出版概況をまとめたうえで『婦人公論』、『家庭週報』、『主婦の友』といった女性雑誌全般を取り上げ、戦時下の女性の生活を分析した。これらの研究によれば、女性の勤労奉仕・勤労働員の諸相が取り上げられた戦時下の女性雑誌は、国家政策のひとつであった。つまり、戦時下の女性雑誌の多くは、戦時下の女性の戦争協力、銃後の生活を描くと同時に、プロパガンダの道具として使われていた。加納(1995)の『女たちの〈銃後〉』は、戦時中の女性の総動員、国防婦人会・大日本婦人会の創立、戦時中の女性の政治参加、戦争協力についての歴史を、新聞記事や当時の日記・体験談を通して記録した研究である。また近年は上野、加納ら(2008)によるドイツ、アメリカ、日本の戦時中に発行された雑誌の分析を行い、女性の戦争活動を国際比較した研究がある。加納(2008:20)は戦時中の雑誌『青年(女子版)』、『日本婦人』を取り上げ、そこで描かれている女性の戦時活動のパターンをAタイプの参加型、Bタイプの分離型に分類した。Aタイプには1戦闘参加、2非戦闘部署、3従軍看護師、Bタイプには1思想戦、2生活戦、3生産戦、4母性・人口戦、5軍人援護、6民間防衛のパターンがある。加納の分析によると、戦時中の日本の雑誌に描かれた日本人女性の戦時活動は、Bタイプの分離型が圧倒的に多く、いわゆる「銃後の守り」という表象が色濃かった。

一方、「映像」の戦争記憶、戦争と女性を扱うドラマを系統的に分析する研究は比較的少ないが、伊藤(2008)と村瀬(2011)の研究がある。戦争映画について分析した伊藤(2008)は2007年8月までに日本で製作された戦争映画を調査し、294タイトルの映画を対象にその傾向をまとめた。年ごとの公開作品数を比較した結果、1940年代から50・60年代にかけて急激に増加し、「1970年代から1990年代には減少傾向が見られ、2000年代にはまた増加傾向にある」と指摘した(伊藤、2008:138)。また、伊藤は対象作品を好戦映画と反戦映画に分類し、年代別に作品数を比較し、傾向を観察した。その結果、敗戦直後、特に50年代は反戦映画の比率が高かった。60年代は50年代に反して、好戦映画が極めて多かった。70年代に入ると、ピークだった60年代とは正反対に戦争映画の量自体が減少し、好戦映画が5本以下となった。

村瀬(2011)は1954年に公開された映画『二十四の瞳』と、1987年にリメイクされたバージョンとを女性の〈銃後の記憶〉に注目して比較し、リメイク版はヒロインの大石先生を中心とする「登場人物の反戦・反権力の思想や心情をあらわすセリフやシーンが大幅にカットされ、作品に内在する反戦のメッセージが希薄化している」と指摘した(村瀬、2011:65)。50年代の作品に強烈に現れた女性=産む性=反戦というイメージには、1950年代の女性を中心とした平和運動の盛り上がりがあったという社会背景が影響していた。しかし、70年代のウーマンリブ運動を経て、男女雇用機会均等法の実施により、女性の多様な生き方が提唱されるようになった。こうした中で公開された1987年のリメイク版の『二十四の瞳』では、「女性=産む性=反戦というステレオタイプを支えた「母性」の自明性自体も相対化されはじめた」ことが反戦メッセージの希薄化と関連していると村瀬は分析した。

戦争と女性に関する先行研究は多数あるが、朝ドラの戦争描写と女性像について注目するのは筆者のみである。2013年度秋季マス・コミュニケーション学会での発表結果を土台に、2011年の『おひさま』の異質性に注目し、その後の作品について分析し、比較したい。

2. 研究方法

本研究は物語の展開を記録するため、アメリカのテレビ番組研究者J・フィスク(1997:216)による、テレビ映像のテキスト分析の手法を参照する。テキスト分析とは、テレビ番組の重要な場面を抽出した上で、セリフないし映像表現を記録し、分析する手法を指す。このような記録・分析によって、番組の中にある構造が改めて読み取られ、その特徴を明らかにする効果がある。テレビドラマの暴力シーンを中心に分析しているD・Rose(2010)は、J・フィスクの用いた方法と類似する転写(Transcription)という手法を取り入れているが、これは、映像分析を行う上で有効なものである。本稿において分析対象となる

のは、2011年以降の戦争描写が含まれる作品：『おひさま』（2011年、AK）、『カーネーション』（2011年、BK）、『梅ちゃん先生』（2012年、AK）、『ごちそうさん』（2013年、BK）と、2014年9月に放送が終了したばかりの『花子とアン』（2014年、AK）の合計5作で、これらの戦争描写・ヒロインの戦争観を考察し、比較する¹。

3. 分析

(1)『おひさま』（2011年、AK）²

朝ドラの「王道」と称された本作品は、ヒロインである陽子の女学校時代から戦争が描かれていた。10回の場面1-1で校長は、戦時中、銃後の生活に貞淑なる家庭の主婦を作ることが学校の役目であると語った。12回の、男性たちの出征を町の人々が楽しく見送るシーンでは、陽子も日の丸の旗を振る一人であった。戦争が進む中、場面1-2で陽子は、兄である茂樹の従軍に対し、「私は、なんだかすごいなと、思った、茂樹兄さんを見ていたわ」と語った。場面1-3では、陽子の生徒が「ぼく達はお国に命を捧げる覚悟だから、そんなに生きてはいないと思います」と話し、陽子は「私はその時のキラキラとした目が忘れられない。とっっても綺麗な目だったわ」と、戦争に賛成の立場から自分の気持ちを語った。その後、結婚の翌日に夫の和成が入隊した。陽子は戦時中、和成の親と共にそば屋を支え、消火訓練や、学校や家での空襲を頻繁に経験した。10回から76回にわたる戦争描写は全156回の放送の48%を占めており、従来の朝ドラよりも詳細に女性の戦時下の生活を描いていると考えられる。終戦を宣告する「玉音放送」が流れた際の陽子の気持ちは、場面1-4のように複雑なものであった。走馬灯のように戦時中の回想シーンが流れ、「体が理解できなかったのよ、戦争が終わるという事。しかも、負けたということが。だって、私が物心ついてから、日本はずっと勝ち続けて戦争していたんだもの」と語り、日本が負けたという事実を受け止められなかった。この作品で見られたのは、戦時中の女性の戦争協力であり、戦争の正当性を疑い、戦争に対する嫌悪感を露わにするそれまでの朝ドラヒロインの反戦の立場とは相反する。

(2)『カーネーション』（2011年、BK）

同じく2011年に制作された『カーネーション』はどのような戦争観と戦争描写を描き出したのか。映像及びテキスト分析の結果、幼なじみの勘助や、夫の勝の出征に直面するヒロインの糸子は、それまでの作品で描かれている女性の「銃後の守り」と一致している。戦時中、夫の出征及び父の病気により、洋裁店の商売で一家の生計を担ったのは、ヒロインの糸子であった。また、頻繁に登場した「大日本愛国婦人会」の愛国宣伝、及びB29爆撃機による空襲、玉音放送のシーンも、80年代以降の朝ドラの戦争描写の特徴を継承しており、従来と変わらない表現となっている。一方、ヒロインの戦争観に関して、ヒロインの糸子は当初、幼なじみの勘助が出征することを聞いて、戦争に行くことに対し場面2-1のように「何が嫌やねん。名誉なこっちゃんか、兵隊に選ばれるんやで」と思った。しかし、戦争が進むにつれ、糸子は戦争嫌悪になっていく。場面2-2で愛国婦人会の婦人たちは、出征になった勝のミシンの供出を要求したが、糸子は激しく抵抗した。「戦争から帰ってきたときに、あれがなかったら主人は仕事がでけへんようになります！」と言う糸子に、婦人たちは「死んでお国の役に立ってこそ、旦那さんの値打ちちゅうもんです！」と言い返し、それに激怒した糸子は彼女らを追い返した。糸子が愛国婦人とは正反対な立場にいるという描写は、本作のヒロインの戦争嫌悪の立場を際立たせている。

(3)『梅ちゃん先生』（2012年、AK）

本作は終戦直前から始まる物語で、初回では戦時中のドキュメント式の映像の後、空襲によって焼け野原となった蒲田の軍需工場での、ヒロインの梅子の働きぶりが映された。場面3-1で、女学生である梅子の「今の工場が焼けたら、どうなるの？」という質問に対し、学校の職員である姉の松子は「そうなる前に日本が勝つわ、きっと。」と語る。姉の考えを聞いて、梅子も納得する表情で「そうよね。」と返した。しかし、その直後、玉音放送が流される。日本が負けたという事実を知り、泣き出す女学生が多かった。一方、梅子は驚きの表情を見せたが、それほど大きな反応をせず、「喜んでいいのか、悲しんでいいのか。梅子はよく分かりませんでした」と、ナレーションが梅子の気持ちを説明した（場面3-2）。その後の、戦時中の竹槍訓練及びバケツの消火訓練の回想場面は、従来の朝ドラでの銃後の守りと類似している。戦後、占領軍が蒲田にやってきて、チョコレートの子供に配る姿をみた梅子は（場面3-3）「「鬼畜英米」って教わったから、アメリカ人ってみんな鬼みたいなんだと思ってたけど、全然違う」と、今までの理解が間違っていたことを姉の松子に語る。

また、第4回に軍医として徴兵された姉の婚約者である智司は、やがて戦死する。梅子は、兄のように慕う智司の戦死を松子とともに悲しみ、家族を失った気分になる。『梅ちゃん先生』での戦争シーンは第一週に集中しており、終戦後の食糧難・闇市及び戦後の復興が詳しく描かれていたが、戦争の要素は梅子が医者になろうと目指し、女子医学専門学校に入学し、その学生生活が中心となった途端に見られなくなった。

(4)『ごちそうさん』（2013年、BK）

この作品では、96回から最終回にわたり、戦時・戦後の女性及びその家族の生活を詳しく描いた。例えばヒロインのめ以子が節米料理に励み、村人の出征のため、千人針を求めるシーンがある。場面 41 では千人針のために訪ねた親友の桜子の店でめ以子が「お国のため」を唱え、愛国宣伝の書籍を「子供の教育にもいいって大評判よ」と話し、意見の異なる桜子と対立する。場面 42 では、西門家全員が幼馴染の源太の出征を心配している中、め以子が「お国のためなんですから。笑って送り出してあげましょう」と言い、姑の静の「こんな戦争、やめてもうたらええのに」という発言に怒り、家族全員と対立するような雰囲気となった。しかし戦争が進むにつれ、め以子の戦争観に変化が現れる。砂糖が配給制となったことは食べるのが生き甲斐であるめ以子にとって、大きな打撃であった（100回）。め以子は「源ちゃんも、イチゴもお砂糖も私の大事なものがどんどん知らないうちに、取り上げられていく気がして・・・」と落胆したように語る。戦況がさらに激化し、全ての物資が配給制となると、め以子が食料品をこっそり蔵に隠す、自宅の鍋を金属供出するといった、従来の朝ドラと同様の食糧難、金属供出の戦時生活が描かれた。め以子は初期の愛国婦人ぶりから一変、「はよ終わったらええですね。戦争」（109回）と言うようになる。また場面 43 では、次男の活男の従軍希望に「あんたは、お母ちゃんを人殺しにするつもりか。」と激しく反対するなど、戦争観の変化が見られた。め以子の次男が従軍した後、夫と長男も出征し、男性が全員前線に向かい、女性が家を守るという「銃後の守り」の図式が見られる。「終戦を告げる玉音放送」の映像も、これまでの分析と同様に、ラジオがクローズアップされ、め以子は「終わった？終わった」と、戦時中の苦勞から解放されたような表情で涙ぐみながら話した。その後、疎開先から大阪の家に向かっため以子はひたすら家族の帰りを待っていた。場面 44 で、義妹の希子がしばらく疎開先で過ごしたほうが安全だと説得しようとしたが、め以子は「ここで待ちたいの！戻って来たら、一番に「お帰り」言うて、ご飯出したいの！」と答えた。これもまた、朝ドラでよく見られる「待つ女」の表象であり、この作品では戦時中の女性の銃後の守り、ジェンダー構造が現代のテレビドラマを通して再現されていた。

(5)『花子とアン』（2014年、BK）

この作品では 133 回以降、ほぼ最終回まで戦争の要素が含まれている。戦況が緊迫していく中、花子、作家の宇田川、友人の蓮子が参加した激励会で三人の戦争観の違いが明確となった。好戦的である宇田川、反戦の態度を隠せない蓮子に対し、花子は「村岡さんはどうお考えになって？あなたはラジオで子供たちに語りかけているから、世の中への影響も大きいわ」と宇田川に聞かれると、「私は・・・子供たちの夢を守りたいんです」（場面 5-1）と曖昧な立場を取る。その後、134 回の、蓮子が花子の「ラジオのおばさん」の仕事を批判する場面で、二人の戦争に対する考えの相違が露となった（場面 5-2）。蓮子は「ラジオのマイクの前で、日本軍がどこを攻撃したとか、占領したとか、そんなニュースばかり読んで、ああいうニュースを毎日毎日聞かされたら、純粋な子供たちはたちまち感化されてしまうわ。お国のために命を捧げるのは立派だと思ってしまう」と花子を責めた。それに対し花子は「私一人が抵抗したところで、世の中の流れを止めることなんかできないわ。大きな波が迫ってきているの。その波に呑まれるか、乗り越えられるかは、誰もわからない（中略）大切な家族さえ守れなくなるのよ」と自らの考えを明かす。しかし、蓮子は「私は、時代の波に平伏したりしない。世の中がどこへ向かうと、言いたいことを言う、書きたいことを書くわ。あなたのように卑怯な生き方はしたくないの」と、花子の生き方は卑怯だと指摘する。かつて腹心の友であった二人は、戦争観の相違で決裂した。その後、138 回の場面 5-3 で、花子は「私の口から戦争のニュースを子供たちに放送することはできません」と語り、長年担当したラジオでの子供への新聞の読み手を辞めることを決心した。この作品での戦争描写の特徴のひとつは、ヒロイン自身の発言よりも、周りの人々、例えば強く反戦を唱える蓮子、積極的に戦争協力の婦人会のお仕事を担当する妹のかよの鮮明な立場から、花子の立場の曖昧さが伺える点である。また、この作品では花子ではなく、親友の蓮子の息子、順平が出征する。ほかの作品と異なり、花子の夫、英治は出征しておらず、ヒロインの家庭では「男性の不在」は見られない。

4. まとめ

(1)銃後の守りの戦争記憶

表 1 2011 年以降の作品における戦争描写の設定

戦争表現	おひさま	カーネーション	梅ちゃん先生	ごちそうさん	花子とアン
戦争関連シーンの割合	48%	26%	11%	36%	16%
男性の不在	◎	◎	◎	◎	×
召集令状	◎	◎	×	◎	×
出征の見送り	◎	◎	×	◎	△ ³
竹槍訓練	◎	×	◎	×	×

鉄製品の供出	◎	◎	×	◎	×
空襲・疎開	◎	◎	×	◎	◎
復員を待つ	◎	×	◎	×	△
戦死の公報	◎	◎	△	×	△
玉音放送	◎	◎	◎	◎	◎
戦時・戦後食糧難	◎	◎	◎	◎	◎
男性による戦争経験の語り	◎	◎	×	×	×

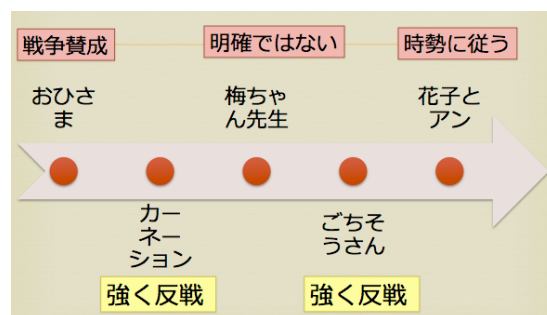
表1は各作品の戦争描写を2010年以降朝ドラ確認ログに照らしながら戦争観の変化を分析した結果、2010年以降の作品における戦争関連のシーンはそれぞれ11%から48%とばらついている。各作品に描かれている女性の銃後生活は類似傾向がある。空襲・疎開、男性の不在の項目は4作が当てはまり、召集令状・出征を見送り・鉄製品の供出は3作で見られる。なお、玉音放送の表現及び戦時・戦後の食糧難という項目は、全ての作品で確認できた。これは、筆者が60年代から2011年までの作品を確認した結果(黄, 2013)と高度に類似していると言える。なお、空襲の項目では、東京大空襲のほか、『カーネーション』、『ごちそうさん』では大阪での空襲による、戦時下における庶民の不安や苦難が描かれていた。朝ドラで語り継がれる戦争の記憶は前線の兵士の戦いではなく、日本本土の女性・庶民の受難史である。

その中で特に注目すべきなのは、玉音放送のシーンである。いずれの作品も映像技法が高度に似ており、終戦を告げるラジオをクローズアップによって強調している。朝ドラにおいて「玉音放送」のシーンは「終戦」の象徴であり、佐藤が『八月十五日の神話』(2005)で問いかけ、『メディアと社会』(2006)、『歴史学』(2009)などの著作で論じた、なぜ8月15日が終戦記念日として日本人に記憶されるようになったのか、という論点に呼応しているといえる。「玉音放送」という日本国民に強い印象を残した出来事は、60年代から現在までの朝ドラで繰り返され、「玉音放送」=「終戦」という記憶を、その映像を通して現代の視聴者に伝えているともいえよう。

(2)2011年以降の作品の特徴

先述したように、2011年以降の朝ドラで描かれている空襲・疎開、戦後の食糧難、及び男性の不在といった女性の「銃後の守り」を中心とする戦争体験は、60年代から2010年までの分析結果と一致している。2011年以降の作品の戦争描写は過去の作品とは、さほど変わらないということがわかった。

本稿でヒロインの戦争観について分析した結果、『おひさま』(2011年、AK)のヒロイン、陽子が兄の志願出征に賛成し、日本の戦敗に大きなショックを受けたという表象は、従来の朝ドラヒロインの戦争観とは大きく違いがあることがわかった。なお、戦争観について2011年以降の作品に注目し、分析した結果、ほかの朝ドラヒロインは一般的に「反戦」のスタンスを示していることが分かる。さらに作品を東京放送(AK)と大阪放送(BK)に分けて比較すると、AKよりもBKのヒロインが「戦争への嫌悪感」を強調する特徴がある。BKのヒロインの「反戦」の表象は80年代のヒロインの路線を継承しており、AKのヒロインの戦争に対する賛成もしくは曖昧な態度とは対照的である。『カーネーション』(2011年、BK)及び『ごちそうさん』(2013年、BK)において、それぞれのヒロイン、糸子とめ以子はともに、戦争初期は戦争賛成であったが、親友や家族(夫・息子)の出征によって、戦争に対し強く嫌悪感を持つようになる。これは80年代の『おしん』(1983年、AK)、『零つくし』(1985年、AK)の描写と似ている。一方、『梅ちゃん先生』のヒロインは終戦に対し、「喜んでいいのか、悲しんでいいのか、わかりませんでした」と反応した。『花子とアン』のヒロイン、花子は親友や家族の態度とは異なり、自らの身を守るために戦争には反対せず、ラジオで軍人の活躍を語る仕事を数年間続けた。後に、戦況を伝えたくないという思いから辞職するが、花子の戦争観は比較的曖昧である。このように、前述した『おひさま』を含め、AKの作品のヒロインによる反戦のメッセージは比較的淡々としている。



結論として、国民的番組と称される朝ドラにおける戦争観は、全体的に「反戦」のスタンスが伺えるが、近年の作品分析を通して分かったのは、東京（中央）のAKと、大阪（地方）のBKとで、ヒロインの戦争観を描く時の違いが確かにあることである。そして、『おひさま』で見られたヒロインの戦争観の異質性は、2011年の東日本大震災が関連していると考えられる。『おひさま』の脚本家、岡田恵和はインタビューで、東日本大震災の発生によって、『おひさま』の設定である「戦争」を語るべきかどうかについて迷ったと語っている。なお、東日本大震災が発生した際に、終戦近くまで書いていたと回想し、岡田氏は当番組の戦争描写について「意図的に変えたというほど明確ではないが、でも微妙に自分の筆の中には何かがあったんだろうなあという感じは拭えない」（岡田、2012:72）と話し、さらに物語の設定について、「これ以上には不幸にしちゃいけないだろうなって（中略）結果としていい悪いは抜きにして、その影響は絶対的に避けられなかった」（岡田、2012:71）と発言している。インタビューの内容から読み取ると、東日本大震災の直後の2011年4月に放送を開始し、5月から戦争が描かれた『おひさま』は、当時の社会状況を考慮し、脚本を微妙に変更したようである。ドラマでは明るく兄たちの出征を見送り、軍人になりたいと夢を語る生徒たちに感動し、そして日本の敗戦によって大きな打撃を受ける陽子の表象は、2011年に日本が受けた震災の衝撃と影響に配慮したもので、全国が一致団結する雰囲気を作ったといえよう。「復興」（ドラマの中では戦後復興、現実では震災復興）を目指すといった社会的背景があったからこそ、脚本もしくはNHK側が戦争へのスタンスを変え、それまでと比べて異質な朝ドラヒロインが生まれたのではないだろうか。

最後に、『おひさま』におけるヒロインの戦争観の転換は、本稿の中心である2011年以降の朝ドラ作品に影響を与えたのか思索したい。それ以前の作品、例えば『純情きらり』（2006）のヒロインがはっきりと「戦争に喜んで行けと、子供たちに勧めることはできません」（黄、2013）と主張したのと比較すると、2011年以降の東京制作のスタンスはやや曖昧化した傾向が読み取れる。何より、強く反戦を語るBKのヒロインと、戦争について「分からない」、「時代の流れに従う」というAKのヒロインの相違から考えると、2011年の『おひさま』が朝ドラヒロインの戦争観の1つの分岐点となった可能性を疑わざるを得ない。

補注

¹ 本稿での映像資料は全て2014年の10月までNHKオンデマンドにて公開されているものである。

² セリフ分析の字数が膨大であるため、原稿では選出した一部のみ掲載し、ほかは付録に収録する。補充資料として学会発表当日に配布する。

³ △として表記するのは、ヒロインの親族・親友の経験であり、作品において重要な軸として描かれている設定である。

参考文献

- 岡田恵和、成馬零一「特集 テレビドラマの脚本家たち 岡田恵和の恐さとは何か」ユリイカNo.610, pp.66-76.
- 加納実紀代（1995）：『女たちの銃後』インパクト出版会
- 加納実紀代（2008）：日・独・米女性の戦時活動，上野千鶴子 編『軍事主義とジェンダー 第二次世界大戦期と現在』インパクト出版会 pp.8-22
- 近代女性文化史研究会編（2001）：『戦争と女性雑誌』ドメス出版
- 黄馨儀（2010）：テレビ文化と女性—初期のNHK朝の連続テレビ小説の形式転換と女性視聴者との関係，『ジェンダー&セクシュアリティ』No.5, pp.61-94.
- 黄馨儀（2013）：「テレビドラマにおける戦争表現と女性像—NHK朝の連続テレビ小説を例に」2013年度マス・コミュニケーション学会秋季大会予稿集.
- 佐藤卓巳（2005）：『八月十五日の神話』筑摩書房.
- 佐藤卓巳（2006）：『メディアと社会—現代を読み解く視点』岩波書房.
- 佐藤卓巳（2009）：『歴史学』岩波書房.
- J・フィスク著・伊藤、藤田訳（1996）：『テレビジョンカルチャー—ポピュラー文化の政治学』梓出版社
- 鶴見俊輔（1991）：『戦後日本の大衆文化史 1945—1980』岩波書店
- 成田龍一（2010）：『増補〈歴史〉はいかに語られるか 1930年代「国民の物語」批判』筑摩書房
- 村瀬敏子（2011）：『二十四の瞳』と越境する〈銃後の記憶〉，高井昌史 編『「反戦」と「好戦」のポピュラー・カルチャー』人文書院
- 若桑みどり（2000）：『戦争がつくる女性像 第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』筑摩書房
- Diana Rose (2000) 'Analysis of Moving Images', in Martin W. Bauer and George Gaskell (Ed), *Qualitative Researching with Text, image and Sound*. London: Sage. pp.246-262.